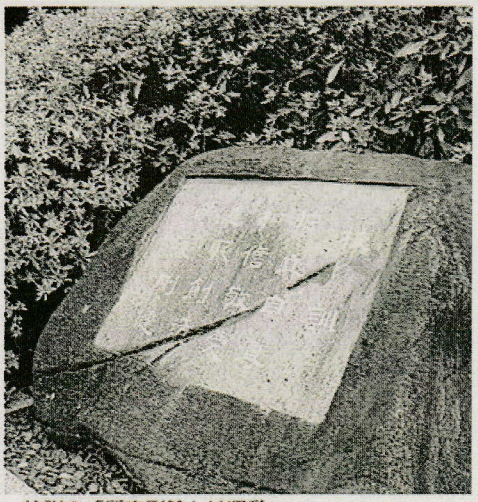
青春スクロール
母校群像記

全国狙い 汗と涙流したグラウンド


校訓の「質実剛健」は運動部の生徒にもあてはまる

栃木高校 ⑥

栃木高校（以下、栃高）の硬式野球部は甲子園に出場したことがある。81年前の1933年、当時は栃木中学だった。投手阿部栄明（故人、1935年卒）、捕手町田徹夫（故人、35年卒）のバッテリーを擁し、準々決勝で松山中（愛媛県）に2－3で逆転サヨナラ負けを喫した。34年の選抜大会にも出場し、栃中の名を全国に知らしめた。2人そろって立教大に進学、六大学野球でもプレーした。栃木県高等学校野球六十年史には「昭和7年から12年ごろまでは栃中、栃商の黄金時代で、両校の試合は栃木市のファンを熱狂させた」という内容の記述が載っている。

野球部の練習を見に通う父親の姿が目に焼き付いているという栃高野球部OB会長小林正男（67、66年卒）は「栃高のユニホームを着たかった」。セカンドで2番。65年夏の栃木大会2回戦で宇都宮学園に5対1で負けた。2013年にOB会長に就任、物心両面で現役をバックアップする。長男の小林真人（35、98年卒）も野球部OB。サードで2番。97年夏の栃木大会1回戦。伝統の栃木商戦は延長10回1対0で涙をのんだ。現在野球部部長としてグラウンドで汗を流す。私立校優勢で80年以上遠ざかっている甲子園に、「TOCHIGI」のワッペンが映える日は来るか。

かつての野球部のグラウンドを背にする小林親子。栃高旋風を期待するOBも多い

サッカーでは永井健太（33、2000年卒）。J2栃木SCの切り札として俊足を生かしたプレーでファンをわかせた。「うちは真剣に勉強も部活もする」という同じ足利出身の先輩の誘い文句で栃高へ。「周りから随分刺激を受けた。医者を目指す部員は合宿中でも『この時間は勉強する』と言って勉強に切り替える集中力がすごかった」

3年夏のインターハイ県予選会は準決勝で宇都宮に3対2で敗退。永井は秋の全国高校サッカー選手権大会県大会まで現役を続けた。「いままで色々な選択をしてきたけど、栃高に進学した選択が僕の中では一番よかった」。今は足利市道路河川整備課で働く。

元栃木SCの永井。持ち前の機動力をいかして足利市民のために走り回る

陸上部は戦後間もなくの48年、第3回福岡国体に3人の選手が出場した。

円盤投げと800㍍リレーの毛塚俊照（83、50年卒）。円盤投げは体力だけでなく技術も大切という。円盤投げの決勝では北海道の選手に最後に抜かれ、6位入賞はかなわなかった。選手は米を持参して大会に出場する時代。シューズはなく足袋をはいて練習、すりむけてくると母親に縫ってもらった。

駒場六郎（84、50年卒）は200㍍、400㍍の短距離と800㍍リレーに出場。リレーでは第3走者で「第2走者が他の選手に押し出されてコースをはずれてしまった」と振り返る。敗戦の影がまだ残っており「目標を失って、その分陸上に打ち込んだのかも」。グラウンドは砂利だらけ。毛塚と同様、シューズはなく裸足か足袋だった。

もう一人は砲丸投げの北川正（故人、49年卒）だった。現役生も頑張っている。岩上琢光（3年）は110㍍ハードルでインターハイに出場した。

実家は栃木名産かんぴょうの卸売り屋「ヤマケ」。毛塚は4代目だ

校長の上岡利夫（59、74年卒）はバレーボール部。2年の夏でやめたが、校庭の隅にコートがあり、そこで練習した。バレーボールは栃木商が強く、「栃商にばろ負けしたことだけは覚えている」。

母校を引っ張る上岡校長

栃高の校訓にはないが、伝統校らしく「文武両道」も実践。11月2日（日）に行われる「第53回栃高耐久レース」は栃高名物の一大イベントだ。OBの回顧にも出てくる。足にまめをつくり、フラフラになりながらも31㌔を走り抜きゴールを目指す。栃高に関する情報はutsunomiya@asahi.comへ。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。